

Opening Special Exhibition

CHRONICLE 1964-2014

History of Yokohama Civic Art Gallery

開館記念展 横浜市民ギャラリークロニクル1964-2014



1964

ごあいさつ

お待たせしました。2013年3月に横浜市教育文化センター内にありました横浜市民ギャラリーを閉館してから、およそ1年半。その間、多くの市民の方々から「開館はまだですか？」の声が寄せられる中、いよいよ“新”市民ギャラリーの再始動です。

初代の横浜市民ギャラリーは50年前、東京オリンピックの年に開館しました。日本中がオリンピックを迎える興奮で沸き立つ中、「横浜も!」と多大な市民のエネルギーが横浜市民ギャラリーをつくらせたのだらうと想像します。3代目の横浜市民ギャラリーはその東京オリンピック開会の日の10月10日にリニューアルオープンを迎える、なんと素敵な偶然でしょう。

創作者の発表の場としての市民ギャラリーの役割は今後とも変わることはありませんが、発表は鑑賞者がいて成り立つのも事実です。もはや美術は「描きつくる行為」ということだけではなく、「見て」「感じて」「考える」という心の作用を伴った鑑賞行為も等価に考えられるべきでしょう。鑑賞は文化芸術を味わうことのみならず、それらを生活に生かしたり、または考え方や社会への提案などに発展させたりなど、能動的な営みと捉えるべきです。「鑑賞者は行動する人」と定義づけられる時代に来ています。横浜はたえず文化芸術のイベントが街のどこかで行われています。いま開催されている横浜トリエンナーレの会場は、足を使い、心を動かし、頭をフル回転させて作品と向かい合う人々で賑わっています。「行動する人」が溢れる都市は活気に満ち溢れています。「鑑賞者の育成」は横浜市民ギャラリーの新たな役割でしょう。

今回、横浜市民ギャラリーのコレクションの中から厳選した138作品を開館記念として市民の皆さまに見ていただけることは喜びに堪えません。コレクションは横浜市民ギャラリー50年の年代史、つまりクロニクルそのものです。これまでを知り、これからを考える。そのような観点でご観覧いただけましたら幸いです。

最後に、紅葉坂には文化施設が並び立ち、古くから「文化の丘」と呼ぶ声もありましたが、何かが足りないと感じていました。今回、横浜市民ギャラリーが加わり、「足りなかったもの」が何であるかが分かりました。市民の皆さまから「文化の丘の市民ギャラリー」と呼んでいただけますよう努めてまいります。

平成26年10月10日

横浜市民ギャラリー館長　三ツ山一志

2014

開館記念展 横浜市民ギャラリークロニクル1964-2014

2014年10月10日（金）～10月29日（水） ※会期中無休
10:00～18:00（入場は17:30まで）※初日は11:00～
横浜市民ギャラリー
入場無料

主催
横浜市民ギャラリー（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団）
助成
芸術文化振興基金、公益財団法人花王芸術・科学財団
協賛
公益財団法人はまぎん産業文化振興財団、
ニューオータイン横浜、株式会社ありあけ
協力
東天紅横浜店、NPO法人黄金町エリアマネジメントセンター、
株式会社エムジィーアーツ
後援
横浜市文化観光局、神奈川新聞社、tvk、RFラジオ日本、FMヨコハマ、
横浜市ケーブルテレビ協議会

ヨコハマトリエンナーレ2014応援プログラム
東アジア文化都市2014横浜パートナー事業

学芸担当　大塚真弓、森未祈、齋藤里紗

デザイン　重実生哉
印刷　株式会社　野毛印刷社
インタビュー映像制作　播本和宜

編集・発行
横浜市民ギャラリー（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団）
〒220-0031　横浜市区宮崎町26番地1
TEL 045-315-2828　FAX 045-315-3033
http://ycag.yafjp.org/

©Yokohama Civic Art Gallery 2014

1964



1

横浜市民ギャラリーの歩み

横浜市民ギャラリー（以下、市民ギャラリー）は、美術を中心とした芸術の創造に寄与し、その普及を図ることを目的として、1964年4月に桜木町駅前の旧中区役所庁舎を再利用して開設されました。鉄筋コンクリート造り3階建、延べ1,320m²の展示室を持つ公立ギャラリーの誕生は、ハマの美術家たちが待ち望んでいたことであり、横浜の美術振興を促す出来事でした。1964年4月に開催された開設記念「横浜総合美術展」には、洋画・日本画・彫刻・写真・書道・華道のジャンルにわたって総勢500名を超える横浜の作家たちが出品し、市民ギャラリーの開館を言祝ぎました。

当時の市長・飛鳥田一雄（1915-1990年。市長就任期間1963-1978年）の依頼を受け、初代館長を務めた詩人・山田今次（1912-

1998年）は、地域文化振興の場としての市民ギャラリーの礎を築く重要な役割を果たしました。山田は、施設の開設・運営に奮闘しながら、横浜を拠点とする作家をはじめ日本の現代美術作家や美術評論家との繋がりを大切に、広く交流を持ちました。市民ギャラリー開設の1964年には、「横浜総合美術展」に続き、同時代の日本現代美術を紹介する「今日の作家展」が企画・開催されました。第1回「今日の作家64年展」は、気鋭の美術評論家が企画に招かれ、磯辺行久、岡本信治郎、加納光於、村上善男、山口勝弘といった作家たち14名が出品しました。開設の翌年1965年には、子ども対象の事業にも目を向け、子どもひとりひとりの個性を尊重し創造性を育むことを目的として、アンデパンダン（無審査公募）形式の「横浜子ども美術展」が開催



2

- 1 桜木町駅前の横浜市民ギャラリー 1966年
- 2 横浜市教育文化センター外観 1998年 撮影：宮崎純安
- 3 「第2回横浜市こどもの美術展」会場風景 1966年
- 4 横浜市民ギャラリー外観 2014年 撮影：takanori ogawa

されました。第1回展には、幼稚園児から中学生まで5,000人におよぶ出品者があり、絵画、デザイン、版画などの平面作品およそ3,600点が展示されました。開設当初から開催された「今日の作家展」「横浜子ども美術展」は、美術を核に文化振興を図った当時の市長や館長の理念を展開しながら、市民ギャラリーの中心事業として継承されています。

開設から10年が経ち旧中区役所庁舎の解体が決まったことを受け、市民ギャラリーは、1974年7月、関内駅前に開設された横浜市教育文化センターに移転しました。これまでの施設より広い、延べ1,831m²（1~3階）の展示室を持ったギャラリーは、以前の施設に比べて展示環境も整備され、横浜の作家たちを歓喜させました。移転後においても市民ギャラリーは、美術団体やグループの発表の場として活用されると同時に、国内外の現代美術の紹介や横浜を拠点とする作家の展覧会、海外の姉妹友好都市との交流展、子どもの美術展や教育普及プログラムといった多岐にわたる自主事業を継続して開催し、市民をはじめ多くの人たちに親しまれてきました。自主事業の開催や作家との交流を通じて収蔵してきた作品は、油彩、日本画、彫刻、版画、写真、漫画、書などのジャンルにわたり、総数1,300点におよびます。所蔵作品は、定期的にコレクション展を開催し広く紹介してきました。建物の経年劣化に加え、2011年3月の東日本大震災の影響によって横浜市教育文化センターが閉館したことに伴い、市民ギャラリーは、2013年3月から約1年半の休館を経て、開設から50年の節目にあたる2014年に新たな地に移転・再オープンしました。



3

「横浜子ども美術展」

無審査で応募者全員の作品を展示する「横浜子ども美術展」は、1965年から50年にわたって継続して開催され、毎回多くの子どもたちが参加しています。アンデパンダン（無審査公募）形式は、初回から現在にいたるまで継承され、子どもの自由で豊かな表現の場を提供してきました。

「横浜子ども美術展」は、公募作品の展示に加え、日常にある身近な素材を使った創作教室「創造のアトリエ」（1975-1982年）、横浜市教育文化センター内にあった文化ホールや視聴覚センターと連携してワークショップや上映会、公演などを実施した「子どもフェスティバル」（1985-1998年）、子どもたちが演技・音楽・舞台美術や衣装制作に関わってひとつの芝居を完成させる「ハマキッズ劇場」（1999-2001年）、より多くの子どもたちに創造の場を提供することを目的とした造形プログラム「ハマキッズ・アートクラブ」（2002年から現在）など時代によって様々な関連事業をおこなってきました。



4

2014

History of Yokohama Civic Art Gallery

Yokohama Civic Art Gallery and the Fine Arts

横浜市民ギャラリーと美術

横浜の美術振興と作家たち

1919年、横浜市 の支援のもと横浜美術協会が創設され、開港記念会館において公募展「横浜美術展」が開催されました。「横浜美術展」は、関東大震災、そして第二次世界大戦と度重なる荒廃と混迷の時期を経ながらも、美術による精神的復興を目指す作家たちによって再興され、1946年から「ハマ展」の名称で継続されています。また大正後期から、横浜を拠点として活動を展開する作家が増え、美術グループが数多く形成されるようになると、グループの会員による展覧会も多く見られるようになりました。こうした作家たちの旺盛な活動が、横浜市民ギャラリーの開設に繋がり、今日にいたるひとつの歴史を形づくってきました。市民ギャラリー開設準備委員には、森兵五、川村信雄、添田定夫、大阪三千司、奥村泰宏、田中雅夫、野田蘭圃、小高一朗、松島一郎、遠藤典太、志村計介、岩田栄之助、永井功の13名の作家が委嘱されています。市民ギャラリーでは、施設を利用する美術団体やグループによる展覧会がおこなわれる一方で、自主企画として横浜在住作家展や横浜ゆかりの作家の個展などを開催し、横浜の美術振興を担った作家たちを紹介してきました。



1



2



3



4

- 1 岩田栄之助《終戦後の横浜港》1947年 油彩、キャンバス 64×79cm
- 2 奥村泰宏《帰還兵とGI》1950年 ゼラチン・シルバー・プリント 33.7×33.6cm
- 3 森兵五《公園風景》1988年 油彩、キャンバス 72.8×72.8cm
- 4 岡本太郎《まひる》1963年 油彩、キャンバス 91×73cm



5

ヨコハマ漫画フェスティバル

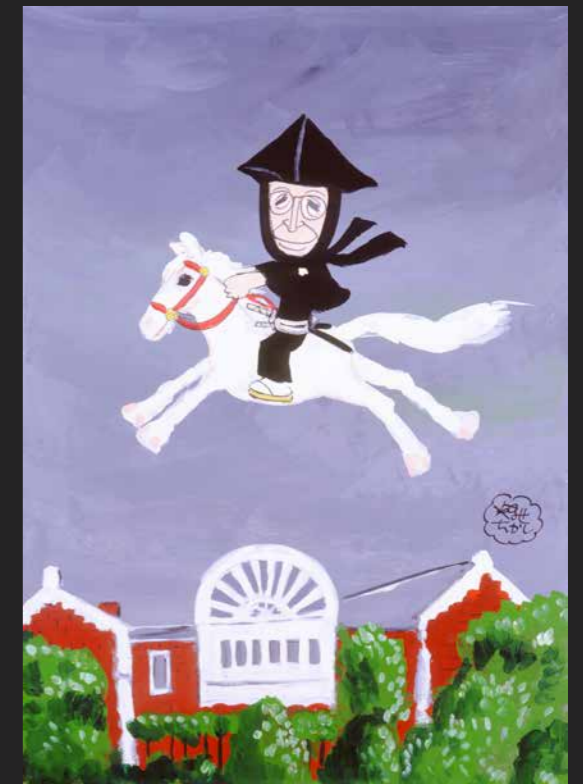
1978年、横浜市民ギャラリーがあった横浜市教育文化センターに面する大通り公園の完成を記念して「ヨコハマ漫画フェスティバル」が開催されました。展覧会には、柳原良平、杉浦幸雄、やなせたかし、赤塚不二夫、ちばてつや、森田拳次、ヒサクニヒコといった〈漫画集団〉*の作家を中心に漫画家やイラストレーターが参加し、横浜の今昔や名所、事始め、横浜にまつわる歌などをテーマに、コマものの漫画とは趣きの異なる大型の作品が出品されました。参加した作家たちの多くは、市民ギャラリーの一室に机やイーゼルを並べて作品を制作しました。市民ギャラリーでは、展覧会に参加した作家32名の作品86点を収蔵しています。

*漫画集団：1932年に横山隆一、杉浦幸雄らが中心となって結成された。当初は、新漫画派集団の名称で集団制作や集団マネジメントをおこなっていた。戦後、漫画集団に改名し、大人向けの漫画を描く漫画家が集まり親睦団体となった。



6

©赤塚不二夫



7

- 5 ヒサクニヒコ《SL開通》1978年 ペン、水彩、紙 73×102cm
- 6 赤塚不二夫《国際都市横浜》1978年 ペン、水彩、紙 72.4×102cm
- 7 やなせたかし《大佛次郎記念館上の鞍馬天狗》1978年 ペン、水彩、紙 102×73cm

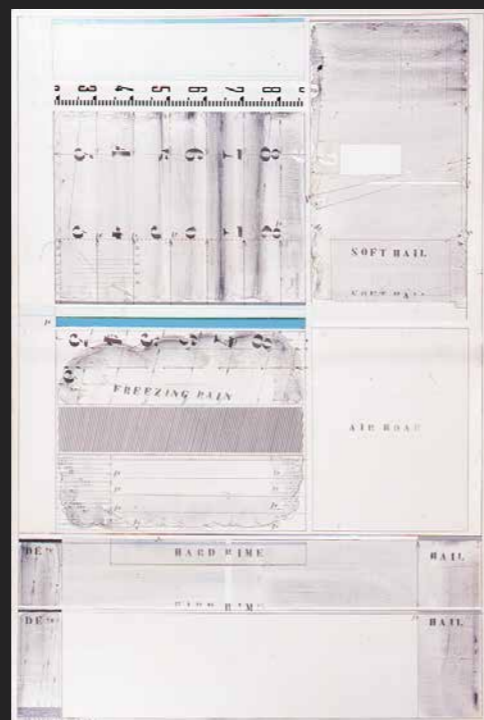
Artists Today Exhibition

今日の作家展

市民ギャラリー開設時の市長・飛鳥田一雄は、地域の文化振興に加え現代美術に関心を持っていたことから〈横浜現代美術館〉をつくる構想を抱いていました。この構想のもとに、東野芳明、中原佑介、針生一郎をはじめとする美術評論家たちが横浜現代美術館開設準備委員会の委員として招かれ、現代美術の動向を取り上げる展覧会「今日の作家展」が企画されました。読売新聞社主催により1949年から東京都美術館で開催されていた無審査形式の展覧会「読売アンデパンダン展」が1963年に終了したこともあって、1964年からはじまった「今日の作家展」は、現代美術を紹介する年次展覧会として貴重な役割を果たすことになりました。2006年まで開催したこの展覧会は、企画に美術評論家やキュレーターを招聘して同時代の作家の表現を様々な角度から紹介し、現代美術のひとつの流れを示す重要な足跡を残しました。

時代とともに表現が多様化し、生活環境のなかにもアートが浸透するようになったことを受けて、「今日の作家展」を受け継ぎながら、より地域の人たちの日常と現代美術との結びつきをもたらす展覧会として、2006年から2010年まで「ニューアート展」、2011年からは創造都市横浜からの発信というコンセプトを加え「ニューアート展NEXT」を開催しています。

- 1 斎藤義重《ボウバンC・青》1971年 合成樹脂、アルミ版 72.3×60.3cm
- 2 村上善男《R気団 76-7》1976年 アクリル、コラージュ、キャンバス 194×130cm
- 3 吉仲太造《大いなる遺産》1963-65年 コラージュ、新聞紙、パネル 182×227cm



2



3



4

第22回 今日の作家展'86 Artists to-day '86 現代美術の黙示録 魂の深淵



1



5



6

- 4 第22回今日の作家展「現代美術の黙示録I」菅木志雄イベント風景 1986年
- 5 菅木志雄《Spreading Wood '86》1986年 木、自然石 440×240×42.5cm
- 6 菅木志雄《レインボーホールNo.2》1991年 シルクスクリーン 60.4×60.4cm

Interview

開館記念展にあわせて、これまで横浜市民ギャラリーの活動を支えてくださった方たちにインタビューをおこないました。横浜市の職員として1972年から1980年にかけて市民ギャラリーの運営に携わられた石井利夫さん、「今日の作家展」や海外の姉妹友好都市との交流展など市民ギャラリーの事業に数多く関わられた美術評論家の小倉正史さん、戦後から横浜を写し続けている写真家で市民ギャラリーで個展を開催されたことのある五十嵐英壽さん、1964年から横浜に移住され横浜の文化振興に貢献されてきた画家の柳原良平さん、絵画制作をおこないながら市民ギャラリーのボランティア活動に長く参加されてきた小笠原タカコさん、以上5名の方にお聞きしたお話しを紹介します。

※インタビューの記録映像は、展覧会会場で公開します。



石井利夫インタビュー

1964年、横浜市民ギャラリー設立

当時の飛鳥田一雄市長の「現代美術館構想」があって美術評論家の針生一郎さん、瀬木慎一さん、中原佑介さんなどをアドバイザーとしてお呼びしてつくりあげたんです。すぐに実現はできないから、現代美術もできるギャラリーをつくろうという行政からの発想と、市民の方（横浜美術協会など）からギャラリーの設立要望があったのがうまく合って、横浜市民ギャラリーができました。

初代館長の山田今次*さんが「民主的というか、親しみのある施設名がいい」と考えて、ちょっとしたきっかけの中で出てきた「市民ギャラリー」という名称が本称になったという経緯を聞いています。美術評論家のメンバーが、最初はあまり納得しなかったらしいのですが、美術館をつくる前段階だからということで了解してくれたと聞いています。それが全国的先駆けになり、他都市からわんさわんと見学に来られたんですよ。

1972年～1980年まで横浜市民ギャラリーに勤務。

山田今次館長の思い出

私は役所の人間ですから、文化や芸術がいつも身近にあるわけではなかったのに、急に市民ギャラリーの係長に任命されました。心細い気持ちでギャラリーに行ったら事務室の一角に山田さんがいて、非常ににこやかな顔で「いやあ、待ってたよ」と言われて本当にほっとしました。豊かな感性の持ち主で、穏やかで、いろいろなことを教わりました。「能書きを言うように作品をみるんじゃない。自分の感性でみてくれよ」とお話しされて、美術に接する態度を私に身をもって教えてくれました。

在任当時の「今日の作家展」

若手作家はみんな表現が思い切っていました。表現のかたちを打ち破りながら新しいものをつくろうとするから、より尖鋭的になる。思いもしないようなものが飛び出してくる楽しさがありました。タブローの抽象画もありましたが、ものとしてのいろいろな作品ができ始めた頃です。理屈じゃなくて、社会の一面を切り取ったり、問題提起したりして作品にするから、同時代性から理解できるわけです。

横浜市民ギャラリーで開催した展覧会

横浜在住の作家を個展形式で紹介する展覧会を始めました。これは非常に評判がよかったですよ。それから当時、文化活動が日常のなかに入り込んできて、要望が強くなったので市民のアトリエを設けて、絵画教室を開きました。そのうちに発表の場がほしいということで、「日曜画



「第3回横浜市こどもの美術展」会場入口 1967年



横浜市民ギャラリー 1972年 撮影：千原康夫

家展」というアマチュアの公募の展覧会を始めたんです。また、社会党のリーダーで当時革新市長と言われた飛鳥田さんは、「市民が主役だ」ということを絶えず言っていた。そのなかで子どもを大切にする姿勢をきちんと行政のなかで取り組んでいこうよということで、「子どもの美術展」がスタートしました。

様々な文化行政に携わるなかで大切にしていること

行政がきちんと文化に対応できるように、行政内部が文化的にならなければいけないという考え方をベースに置いてやってきました。日常の人間関係や人間の営みを大切に見ていく、そういう姿勢ですね。

※山田今次：1964-1978年横浜市民ギャラリー館長。現代詩人。

2014年6月25日 東天紅横浜店にて

聞き手：森 未祈（横浜市民ギャラリー）

石井利夫（いしゐ・としお）

1941年横浜市生まれ、在住。1960年から横浜市職員。1972～1980年横浜市民ギャラリーに係長として勤務。横浜美術館の立ち上げ、横浜能楽堂の運営に携わる。2002～2006年三溪園園長を務める。横浜市退職後、現在は地域での町内会活動や法務省の人権擁護委員として活動する。



小倉正史インタビュー

日本の現代美術における「今日の作家展」

私自身は、読売アンデパンダン展の出品作家たちと交流したことが現代美術の世界に入るきっかけでした。読売アンデパンダン展が終わると、コンセプチュアルアートやミニマルアートが始まり、そこからもの派が出てきました。1970年代末から1980年代にかけて、いわゆるニューペインティングが流行り、それまでの抽象性・観念性の高いものから具象的なものが入ってきました。こういった歴史を「今日の作家展」は反映していますね。そういった意味で非常に貴重だと思います。

実行委員会委員として企画された、第30回今日の作家展

「洋上の宇宙 アジア太平洋の現代アート」（1995年）

私は、色々な民族のアートを紹介することに関心を持っていました。ジン・ミー・ユーンは、韓国出身ですがバンクーバーに移ってからアーティストになりました。彼女は今、バンクーバーのサイモン・フレーザーズ大学の教授になっています。黄金町バザール2014に来ていたシンディ・望月が彼女の教えを受けたアーティストです。こういった国際的な交流の結果が出てくるといいですね。その中心として横浜は機能し、それが横浜トリエンナーレに繋がると思います。

ゲストキュレーターとして企画された、第31回今日の作家展

「DISPLACEMENT 横浜から横浜へ」（1996年）

「移動」が自由になり情報も多様化し、流動性が高くなった時代でした。そういった流動性を反映するような展覧会を、流動性の中心のような都市・横浜で出来ないかと企画しました。草間彌生さんの《私の魂を乗せてゆくポート》は、移動のひとつのメタファー、シンボルになっています。ラニ・マエストロは、フィリピン出身ですがカナダに渡ってモントリオールで美術学校の先生になり、今はフランスに在住しています。移動によって生じる文化と文化の摩擦は今を考えなくてよくなってきていますが、そうしたものを尊重するようなアートのあり方が必要だと思います。



第31回今日の作家展「DISPLACEMENT 横浜から横浜へ」展示風景 1996年 横浜市民ギャラリー 撮影：内田芳孝

作家との交流

私の場合は、アーティストがいなければ存在できないような位置にいるわけです。キュレーターにとってアーティストはなくてはならないし、仕事上の関わり方ということではなくて、アーティストに共感し互いに信頼感を持って展覧会が作ればいいというのが私の基本的な考え方です。

横浜のアートシーン

人間的な関係を強めたり、もっとよくしていくようにアーティストの活動を紹介したり、そういったセンターとしての市民ギャラリーのあり方がいいと思います。啓蒙的な活動など形式の上ではなく、具体的な作品を通して人と人が結びつくような機会をどうやって作ったらいいかということですね。地域と密着し社会のなかに位置づけられるアートのあり方と、国際的に繋がる可能性をもたらしてくれるアートのあり方と、その両面がうまくいくように願っています。

2014年6月17日 M・Z artsにて

聞き手：大塚真弓（横浜市民ギャラリー）

小倉正史（おぐら・まさし）

1934年生まれ。美術評論家、国際美術評論家連盟会員。1994年フランス芸術文化勲章シュヴァリエ賞受賞。『横浜市民ギャラリー開設25周年記念 今日の作家展 1964-1989』（1990年）編集委員長。「第28回今日の作家展」「横浜コンスタツツ姉妹都市提携15周年記念展」「横浜サンディエゴ姉妹都市提携35周年記念展」（以上1992年）、「第30回今日の作家展」「横浜バンクーバー姉妹都市提携30周年記念展」（以上1995年）の開催・実行委員会委員、「第31回今日の作家展」（1996年）ゲストキュレーターなど、数多くの横浜市民ギャラリーの事業に関わった。



五十嵐英壽インタビュー

神奈川新聞社に入社した1952年当時の横浜港の風景

大統領の名前を冠した船APL（American President Lines）が定期航路を往復していました。その他には、フランスのラ・マルセイエーズが、MMラインでフランスと日本を往復していました。その頃、大さん橋はのっぺらぼうでしたからね。どこかによじ登ったり、ビルの2・3階を借りたりしながら撮影していました。山下公園の中もほとんどが米軍住宅だったんです。それが少しずつ、占領が解けて公園らしくなっていました。実際に横浜が横浜らしい動きを始めたのは1953年から1954年。その間に、接収されていたかまぼこ兵舎も片付け始めた。伊勢佐木町寄りの方、吉田町商店街から向こう側はほとんど米軍の兵舎でした。

撮影で使用したカメラ

スピードグラフィックという、アメリカの軍隊で使うカメラです。フィルムは、1パック12枚撮り。1枚が4×5インチですから大きいですよ。それが12枚セットになったものを番号順に引っ張って。小型カメラも持って、自分用の写真を撮っていました。当時は、新聞社からひとつの取材にフィルムは3枚以上使うと言われていました。それぐらい節約しないと駄目だった。新聞社も貧乏でしたからね。



《新港4号待合室》1957年 ゼラチン・シルバー・プリント 32×47.5cm



《ハマの三塔》1953年
ゼラチン・シルバー・プリント
47.6×32cm

報道写真と作品の違い

仕事用の写真と、自分用の写真と撮り方が全然違うんですよ。新聞に使う写真は、読者にわかりやすい写真をつくらないといけない。ところが自分用の写真は、自分の主張はどこにあるのかという見方をするわけです。それは偶然いいものが出ることもあるし、多くは無駄だったと思うこともあるし。昔のスピードグラフィックというのは、フィルムとカメラが別になるんです。自分の写真を撮る時は、自分用のフィルムを入れて撮るんです。1枚撮るのに神経を使いますよ。ここでシャッターを押しても、「この写真はどうか？」と思う時は我慢して撮らない。考え方の違いですが、何でも数を撮ればいいってもんじゃないですから。

横浜を写し続ける理由

僕は北海道出身といっても函館なんです。そこで船を見ながら育っているわけです。横浜に行ったら大きい船を撮ろうと思って喜んで来ました。来たら船のスケールが違うんですよ、外国航路の船というのは。それはびっくりしました。こんなにきれいな船があるのだと。まさに動くホテルですよ。とにかく、今の横浜は撮っておかなくてはならないなと。それで仕事で行った先で、仕事ではない作品も撮っておいたので、それが今残っているんです。写真っていうのは、絵と違ってごまかしようがないでしょ。

その時でないとは撮れない。そういう意味では、人より余分に働いたのかな。その時には役に立たないけれども、そのうち何か役に立つようにね。

2014年6月26日 東天紅横浜店にて
聞き手：大塚真弓（横浜市民ギャラリー）

五十嵐英壽（いがらし・えいじゅ）
1931年北海道生まれ、横浜市在住。大さん橋が米軍の接収解除となった1952年に神奈川新聞社に入社。1988年に写真集『横濱みなとの唄』（神奈川新聞社）を刊行し、1989年に「五十嵐英壽写真展よこはま・みなとの唄」（横浜市民ギャラリー）を開催。横浜の姉妹友好都市であるオデッサ、コンスタンツァ、サンディエゴとの交流展に参加。『鎌倉行進曲』（神奈川新聞社、1997年）、『素顔のモロッコ』（2000年）、『出船入船横浜今昔』（横浜写真塾、2003年）、『函館臥牛山』（横浜写真塾、2005年）『いまも百舟百千舟』（横浜港振興協会、2009年）など著作多数。



柳原良平インタビュー

写真提供：せんたあ画廊

1964年、横浜市山手に移られた当時の「横浜」

当時は、根岸線の開通の日で東京・大田区からトラックに便乗して山手に引っ越して来ました。そこらじゅう川だったと思います。今の首都高の地下道や大通り公園も川でした。イセザキ町の入口のすぐ前も川で、モーターボートや大学のボート部の練習場になっていました。山手のあちこちにまだ駐留軍のカマボコ兵舎がありました。

「ヨコハマ漫画フェスティバル」（1978年）の思い出

その頃、私は、都市美審議会の委員だったと思います。都市計画局の人からたのまれて、これからの横浜の未来像などマンガに描いたりしたので、それを大々的にやろうということになったのだと思います。漫画団のメンバーだったので仲間に声をかけました。集まるのが好きな人たちがすから、みんな喜んで来てくれました。描き終って重慶飯店で食事をして、あと有志で関内のクラブへくり出して大喜びです。

「ヨコハマ漫画フェスティバル」に出品した作品について

《横浜ドックのカンカン虫》

吉川英治は、昔、若い頃造船所で働いていたということで絵にしました。



《横浜ドックのカンカン虫》1978年 ポスターカラー、紙 72.6×102.9cm

横浜船渠という造船所で、船渠と書いてドックと読むのです。外国語をあて字でのち、マスコミの記者たちが「せんきょ」なんてルビをふっていますが大まちがい。せんきょなんて言ったことはありません。麦酒がビール、煙草がたばこと同じです。その頃は溶接ではなくて鋸で鉄板をつないでいましたので、熱い鋸を両側から叩いてつぶすのでカンカン音が出ます。氷川丸の舷側を見ると鋸がわかります。ヘルメットの無い時代、カンカン帽をかぶって作業をしていました。



《開港記念会館》1978年
ポスターカラー、紙
102.5×72.4cm

《開港記念会館》

昔は、横浜港へ入って来ると3つの塔が目立ちました。外国の船員がチェスの駒になぞらえて県庁をキング、税関をクイーン、そしてこの横浜開港記念会館をジャックと呼んだそうです。中でもジャックが一番美しいと思いませんか。

2014年7月 書面にて
聞き手：大塚真弓（横浜市民ギャラリー）

柳原良平（やなぎはら・りょうへい）
1931年東京都生まれ、横浜市在住。画家、漫画家、イラストレーター。壽屋（現サントリー）宣伝部で制作した「アングル・トリス」が人気を博し、毎日産業デザイン賞、電通賞受賞。1964年広告制作会社株式会社サン・アドを設立。1974年せんたあ画廊（横浜）で個展開催（以後継続して開催）。1977年横浜文化賞、1990年運輸省交通文化賞を受賞。2013年海洋立国推進功労者総理大臣表彰。『柳原良平の船の博物館』（1985年、東洋経済新報社）、『良平のヨコハマ案内』（1989年、徳間書店）、『柳原良平 船キチの航跡』（2003年、海事プレス社）など著書多数。



小笠原タカコインタビュー

絵を学び始めた頃

美大受験のために、横浜で唯一の画塾だった川村信雄先生（1892-1968年。横浜市民ギャラリー収蔵作家）の画塾に中学3年のときから通っていました。初めてデッサンや油絵の手ほどきを受けました。そのときに百合の花を描いたのですが、先生の批評は一言で「君の百合は綿入りの百合だ」

と。ぼてっと描いたということですよ。それで「くそー」と思って精進しました。多摩美に入って、それから高校の教師を5年くらい続けて、それとは別に3歳から小学校6年生までの絵画教室で子どもたちと接していました。

横浜市民ギャラリーとの関わり

「横浜市こどもの美術展」に私が面倒をみている子どもたちの作品を出品したことが最初です。山田今次先生は横浜の子どもたちにもっと絵画を広めたいという心で子どもの美術展をなさっていました。参加賞は立派な七宝焼きのピンバッジで、今も大事にしている宝物です。



ボランティア活動を始めたきっかけ

病気をして、治療に専念するため10年間だけ筆を折ったんですね。回復してからは、自分のためではなくて他の皆さんのためにできることをやりたいと思い、ボランティアの世界に入りました。横浜市民ギャラリーでは、いろいろな企画展の勉強会に参加したり、お客様の鑑賞やワークショップのお手伝いをしたりしました。毎回とても楽しくて、自信をもってボランティアができました。今は、中途障がいの方を絵画治療でお手伝いしています。片手が動かないとか視野が狭いとか、色がわからないなど様々なんですね。若い方もお年寄りもいらっしゃいます。最初はどうか接したらよいかわからなかったけれども、一生懸命勉強して、今は続けて10年くらいになります。いろいろなところで私自身の力でお手伝いができて、その方の気持ちの前向きになる喜びを感じたときにすごく嬉しかったんです。これからもずっと続けたいと思っています。なぜか美術と離れられないんですよ。

横浜トリエンナーレのボランティア

第一回目からお手伝いをしています。ディレクターの方によって様変わりするので目新しいし、現代アートを「なんだこれは」と思う人がいっぱいいて、「こういうふうにみるといいんじゃない」とお手伝いするのはとても楽しいですね。自分の感覚で受け入れられるものもそうでないものもあるけれど、これもおもしろいなという興味の気持ちで受け止めてみるとおもしろいと思うんです。やはり好奇心旺盛でミーハーなのかもしれない。

新ギャラリーのオープンに向けて

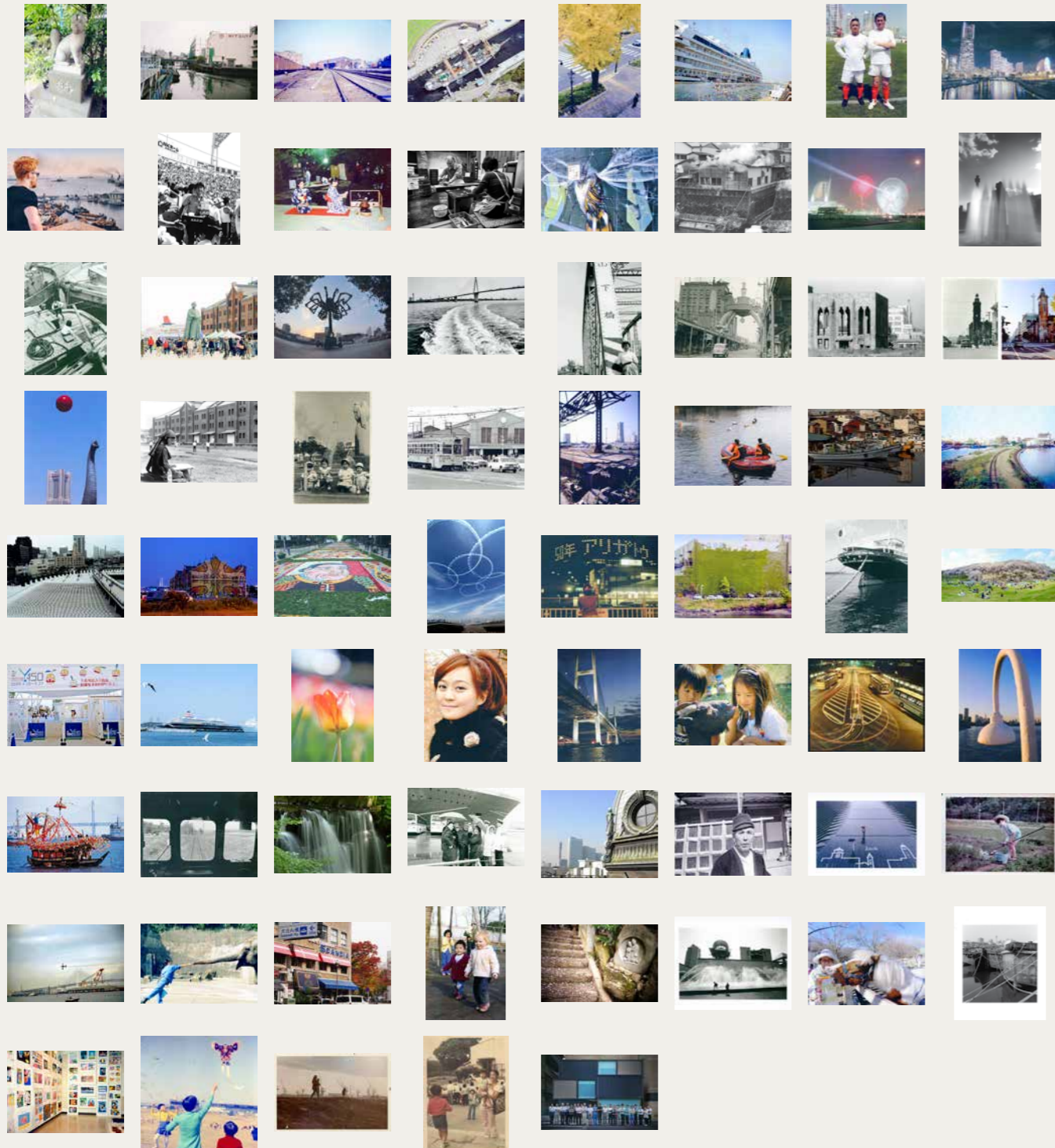
新しいギャラリーになると場所や地域の特徴が変わるわけですよ。それはそれなりの良さがあると思います。新しいことをしようと思うと、いろいろと妨げる気持ちの人もいるかもしれないけれど、もっと前進して頑張ってもらいたいと思います。

2014年7月3日 産業貿易センタービルにて
聞き手：森 未祈（横浜市民ギャラリー）

小笠原タカコ（おがさわら・たかこ）
1940年横浜市生まれ、在住。多摩美術大学絵画科（油画）卒業後、高校教師をする傍ら、子どものための絵画教室でも教える。現在は自身の絵画制作を続けながらボランティア活動に取り組む。日本美術家連盟会員。太平洋美術会会友。

Watashi no Yokohama ワタシノヨコハマ

横浜市民ギャラリーが開設された1964年頃から現在までに撮影された横浜のスナップ写真を市民の皆様に募集し、69名178点のご応募をいただきました。ここではご応募いただいた69名全員の写真の中からそれぞれ1点ずつをご紹介します。お気に入りの風景や家族とのスナップ写真には、一人一人の大切な思い出が凝縮されています。それらを俯瞰してみると、個人の記憶と共に横浜の50年の歩みも感じ取ることができるのではないのでしょうか。



ご協力いただいた方々(敬称略)写真左上から 清水亨桐/幻のカメラマン/秋本進/雨宮富美/入江敏之/飯塚 宏/三ツ山一志/橋本隆之/六藍/藤井信/星崎雅代/金指栄一/沖進/長谷川修/小藤田修/妻鳥清/雨宮ゆき/浅野昇司/清水悠/高橋洋子/保坂とし子/樋渡與志子/奥山純功/はまゆう/山本眞治/石川賢吾/umt/高島博/初山武/立野皓庸/神野愛子/山中洋路/三枝木浩二/サノアキ/五嶋和夫/中野りあ/越智祥之/羽島誠也/小澤こう/小林紀夫/前島文子/中本正成/アートフォレスト/岸勝彦/高橋亨利/月岡悦子/橋高造/高階満美恵/田崎龍一/千原康夫/弘田茂穂/山本明/宮越寿雅子/杉本鉄雄/関根正/桑田瑞穂/金子博/磯野淳子/ゴトウヒロブミ/藤田清一/腰塚仁美/黒川正彦/masa/Satoru OZAWA/あや子/相澤詔二/MM/Y/松本陽一設計事務所

トークイベント

アーティストトーク

日時：10月12日(日) 14:00~15:30
 出演：菅木志雄(現代造形作家)
 聞き手：柏木智雄(横浜美術館 主席学芸員)
 会場：横浜市民ギャラリー4階アトリエ

「今日の作家展」をめぐって

日時：10月18日(土) 13:30~15:00
 出演：逢坂恵理子(横浜美術館 館長)
 会場：横浜市民ギャラリー4階アトリエ

漫画家親子対談 ヒサクニヒコ×久正人

日時：10月19日(日) 14:00~15:30
 出演：ヒサクニヒコ(漫画家・イラストレーター)、久正人(漫画家)
 聞き手：山内康裕(マンガナイト代表)
 会場：横浜市民ギャラリー4階アトリエ

横浜市民ギャラリーと美術—東アジアのアートシーン

日時：10月26日(日) 14:00~15:30
 出演：小倉正史(美術評論家)
 会場：横浜市民ギャラリー4階アトリエ

学芸員によるギャラリートーク

日時：10月13日(月・祝)、25日(土) 14:00~14:40
 会場：横浜市民ギャラリー展示室

親子向けワークショップ「アート・ハット」

日時：10月11日(土)、13日(月・祝)、17日(金)、24日(金)、25日(土)
 13:30~16:30
 会場：横浜市民ギャラリー4階アトリエ

謝辞

この展覧会を開催するにあたり、多大なご協力をいただきました。次の個人、関係機関に深く感謝申し上げます。(敬称略・五十音順)

賛助

秋本進
 五十嵐英壽
 石井利夫
 岩田順
 内田芳孝
 小笠原タカコ
 小倉正史
 草間彌生
 斎藤知子
 佐藤毅
 菅木志雄
 千原康夫
 常盤とよ子
 富澤里多
 ヒサクニヒコ
 久正人
 宮崎純安
 村上美智子
 森織葉
 山内康裕
 柳原良平

株式会社フジオ・プロダクション
 公益財団法人岡本太郎記念現代芸術振興財団
 公益社団法人日本漫画家協会
 せんたあ画廊
 有限会社やなせスタジオ
 横浜美術館



横浜市民ギャラリー

